

『2018 年度学生生活実態調査報告書』刊行にあたって

本書は、学生センターが実施している「学生生活実態調査」の2018年度報告書です。毎年ほぼ同様の質問項目を設けていますので、これによって法政大学における学生生活の変化を知ることができます。詳しい分析は本書の「調査結果に関する報告」に譲りますが、ここではこの調査の結果と実体験とから感じたことを述べておきたいと思います。

いま注目したいのは、5の「モラル・マナー」です。「調査結果に関する報告」にも記されているように、2008年度には「低下・欠如」を感じている人が85.3%を占めていましたが、2018年度は55.1%であり、この10年間で大きく改善してきたと言えます。これは例えば、「食堂の食器の持ち出し・放置」を考えてみるとよく分かります。この問題が特に顕著だったのは市ヶ谷キャンパスになりますが、2008年度に市ヶ谷キャンパスでこの問題を指摘した人は68.8%いました。しかし現在は10.3%にまで減っています。実際、かつて学生ホールやヘリオスには食堂の食器が山積みされるほど放置されており、ボアソナードタワーの上階のゴミ箱から食器が発見されたこともありました。食堂業者から被害額が数百万円にもなっていると苦情を寄せられたこともありました。もちろん現在も食器放置は見られますが、その数は激減し、かつてのように山積みされることはなくなりました。この間の教職員や食堂業者、清掃担当者による努力の成果であり、草の根の泥臭い努力が結実したことを喜ばずにはられません。

では、何が奏功したのかと考えてみると、「放置する」という意識が学生たちから失われたことが大きいのではないのでしょうか。人は「放置」されている状態を見れば、「放置して良いのだ」という意識を持ちやすくなりますし、同時に「自分が放置してもばれない」という意識も持つようになります。このような意識を後退させるには、まずは「放置」されている状態ができるだけ認識されないように、細かく片付けていくことが大切なのだと思います。そう考えると、モラル・マナーの「意識」の低下や欠如という点を問題にする前に、「認識」の有無を問題にする方が意味が大きいような気がします。

さて、先ほど「調査結果からモラル・マナーは大きく改善してきたことが分かる」という旨の記述をしたわけですが、そうとばかりも言えない現実があるのも事実です。

小金井キャンパスでは交通マナーに関する苦情、コンビニエンスストアの利用に関する苦情が絶えず大きな問題になっています。しかし、本調査の自由記述欄を見ても、これに関する言及は見えません。つまり、ほとんどの人がそういった問題があることを「認識」すらしていないということなのだと思います。構内放送や掲示だけでは「認識」の向上を図ることに限界があるのはすでに明らかです。今後、こういった問題に対する「認識」をいかに高めるかは、学生センターにとって大きな課題であると言わざるを得ません。

また、このような「認識」の欠如・不足に起因する問題はマナー・モラルだけにとどまりません。最近、急速に拡大している投資に関わるマルチ商法も、被害者・加害者ともに「認識」が欠落していることに端を発しています。それは、そこで扱われる商品への「認識」の欠落だけではありません、そもそも「当事者」としての「認識」がごっそりと抜け落ちてしまっています。飲酒問題やドラッグの問題も然りだと思えます。

次から次に顕在化する様々な問題に対して「認識」を高め、広めていくことは、学生センターに課された大きな使命ですし、学生の成長を促すことを本来的な役割として担っている大学の務めだと思います。そのためには、お題目を唱えるのではなく、「食器放置」の問題の時と同じく、草の根の泥臭い努力こそが大切なのだと思います。

以上、今年度の報告書を読んで感じたことを述べさせていただきました。

昨年度の繰り返しになりますが、大学はプログラムに則って「規格品」を作り出すところではありません。それぞれがそれぞれに主体的に活動し学ぶことで、全人格的成長を遂げる場所だと思います。そのためには正課外の活動や経験も極めて大切です。その時々で社会状況は変わりますが、その時々々の状況を見極めて学生生活をサポートしていくのが、学生センターの役割だと考えています。そのためにも、本調査が継続的に実施されることは大変有意義なことであると思いますし、本調査の結果を有効に活用することで学生生活をより良いものにしていければと思っております。

2018年12月

学生センター長 齋藤 勝